

なぜ物質的対象は複数存在すると考えるべきなのか？ (1)

Why should we believe in more than one material object?

小山虎

慶應義塾大学非常勤講師

KOYAMA Tora

Keio University

Abstract

In analytic metaphysics, there are many exotic ontologies, such as modal realism, four-dimensionalism, trope theory, and so on. Although common sense appears to conflict with them, they are considered as being worth serious consideration for some reasons.

In this paper, I will discuss Monism: a newcomer of such ontologies, according to which there exists only one material object. However, the aim of this paper is neither to defend nor to refute it. I will argue that the disputes over Monism tell us that ontologies in analytic metaphysics should be regarded as theories of ontological priority.

1. はじめに

分析的形而上学では、可能世界・時間的部分・トロープなど、一般常識では想定されていない様々な対象が登場する。これらの存在を積極的に認める存在論は、いかに常識に反しようとも、それなりの理由により少なくとも検討に値すると考えられているのである。

こういった存在論の中でも、特に最近仲間入りしたのが **Monism** である (2). これは、物質的対象はただひとつしか存在しないという存在論である。たったひとつの対象だけでは何も説明できるはずがないのだから、これは検討に値しないと思われるかもしれない。だが、Monism をまじめに検討すべきだという議論には説得力があり、実際、規模はまだまだ小さいものの、Monism に関する論争も現在進行中である。

しかしながら、本稿の目的は Monism を擁護することでも反駁することでもない。むしろ、Monism に関する賛否両方の議論を検討することを通じて、分析的形而上学における存在論がどのようなプロジェクトなのかを論じたい。

2. なぜ Monism は検討に値するのか

なぜ Monism は存在論的立場としてまともな考察に値するのだろうか。この点を理解するためには、まず、メレオロジーと物質的対象の存在論の関係について考察しなければならない (3)。議論の余地はあるが、物質的対象の間でメレオロジーが成り立つと考える論者は少なくない。また、物質的対象の存在論を考えるにあたり、まずはメレオロジーを手がかりにする論者はかなりの数にのぼる。こういった論者の間では活発な議論が行われているが、Monism はこうした議論の中で、〈メレオロジーを手がかりにした存在論的立場〉のひとつとして新たに登場したのである (4)。以下では、メレオロジーに関してどのような存在論的対立が生じるのかを確認し、Monism がまともな存在論的立場であることの妥当性を検討する。

2.1. メレオロジーと物質的対象の存在論

メレオロジーとは、厳密には、部分全体関係を表現する公理系のことである。メレオロジーには様々な体系があるが(詳しくは、Simons (1987) や Varzi (2003) を参照されたい)、古典外延メレオロジー (classical extensional mereology) と呼ばれる体系を考えるのが一般的である。これは、一階の述語論理を、ある半順序関係を表す述語 (これは部分全体関係を表すことが意図されている) と、同じ部分から成る対象は同一であるという公理 (これは外延性と呼ばれる)、および、任意の複数の対象に対して、それらすべてから成る対象が存在するという公理 (5)

(これは無制限融合 (unrestricted fusion) と呼ばれる) で拡張した体系である。以下、古典外延メレオロジーのことを単に「メレオロジー」と呼ぶ。

メレオロジーは物質的対象の存在論にとって大きな役割を果たしていると考えられる。なぜなら、物質的対象の間ではメレオロジーが成り立つと考えられる根拠がいくつかあるからである。その根拠のひとつは、物質的対象と空間領域に密接な結びつきがあることである。空間領域の間でメレオロジーが成り立つことは明らかだと思われる。そして物質的対象は必ず何らかの空間領域を占めるのだから、物質的対象についても、それが占める空間領域に対して成り立つのと同じ関係が成り立つと考えるのは自然なことではないだろうか。

実際、われわれが部分の概念を物質的対象に対して用いていることが無視できない以上、物質的対象の間で何らかの部分全体関係が成り立つことは否定できそうにない (この関係をメレオロジーとして形式化できるかどうかは別の問題である)。また、部分全体関係の基礎となる関係を半順序と想定することももっともだと思われる (6)。しかし、メレオロジーの公理のうち、残りの二つには大きな問題があることが知られている。まず、外延性の公理については有名な「反例」がある。粘土の像とそれを構成している粘土のかたまりがそれである。像の一部、たとえば頭部は、像を構成している粘土のかたまりの一部でもあり、像のどの部分に関しても同様である。実際、両者が占める空間領域は完全に一致している。だが、両者は同一の対象ではないかもしれない。像は成型されるまでは存在していなかったが、粘土のかたまりはそれ以前から存在していたからである。この問題は、**一致のパラドックス (paradox of coincidence)** と呼ばれる有名な問題である。ただし、だからといって、物質的対象の間でメレオロジーは成り立たないという考えが広く受け入れられているわけではない。

一致のパラドックスを巡る議論は非常に興味深いものではあるが、本稿のテーマである Monism に直接関係してはいないため、本稿では論じない (7)。だが、もうひとつの公理、無制限融合を巡る議論はまさしく Monism へ通じている。

2.2. 無制限構成の原理を巡る存在論的対立

無制限融合に対応する存在論上の原理は、**無制限構成 (unrestricted composition) の原理**と呼ばれている (8)。これは、任意の複数の対象に対して、

それらから成る別個の対象が存在するとする原理である。つまり、メレオロジーを認めることは、いかなる複数の対象に対しても、それらから構成された別個の対象が存在する、ということ認めることなのである。たとえば、 $a \cdot b \cdot c$ という（互いに共有する部分を持たない）三つの対象があるならば、 a と b から成る第四の対象 $a+b$ 、 a と c から成る第五の対象 $a+c$ 、 b と c から成る第六の対象 $b+c$ 、 $a \cdot b \cdot c$ すべてから成る第七の対象 $a+b+c$ も存在することが、無制限構成の原理によって保証される。要するに、メレオロジーに従う対象は図1のような階層をなすのである (9)。

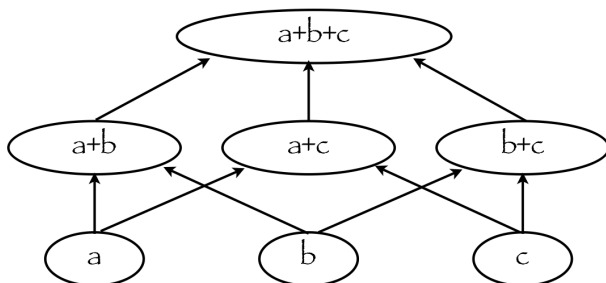


図1 メレオロジー的階層

この階層をそのまま受け入れる存在論（この階層に含まれるすべての対象の存在を認める存在論）は、**(Mereological) Universalism**(10) と呼ばれる。

Universalism：メレオロジー的階層に含まれるすべての対象が存在する。

ある物質的对象がほかの物質的对象から構成されていることは、ごく当たり前の光景だと思われる。たとえば、いま私の目の前にあるパソコンは、モニターやキーボードといったパソコンそのものとは別の物質的对象から構成されている。そして、これらも同様に、別の物質的对象から構成されている。たとえばモニターは、液晶や外枠、各種ボタンから構成されている。また、こういう物質的对象はどれも物質からできており、その物質は素粒子からできている。このことは、ほかの多くの物質的对象についても同様だろう。よって、物質的对象の間でメレオ

ロジーが成り立つと言えそうに思われる。

しかし、モニターやキーボードが別の対象（この場合は私のパソコン）を構成するということにも注目すると、次のような疑問が生じる。無制限構成の原理は、その名の通り、こういう構成が無制限に生じることを要求する。したがって、たとえばモニターの液晶とキーボードだけによって構成されている対象（以下、これを「液晶+キーボード」と呼ぶ）も存在しなければならない。だが、これはいったいどのような対象なのだろうか。この「対象」に当てはまる一般的な名詞や述語は存在せず、また、この「対象」独自の機能も無い。この「対象」を構成しているモニターの液晶とキーボードには、それぞれに当てはまる述語もあり、それぞれ機能も持つが、この二つがあわさったものである「液晶+キーボード」には何の独自性も無い。いったいどういう意味でこの「対象」は対象なのだろうか。

無制限構成の原理を認める限り、こういった「対象」が次々と生まれることは明らかである。よって、構成は無制限に生じるのではなく、何らかの条件が満たされたときのみ生じると考えるべきだと思われるかもしれない。紙面の都合上、詳しく検討することはできないが、そのような条件を特定することは容易でないことが知られている (11)。

Universalism を受け入れない論者の中には、構成の条件を特定することをあきらめ、代わりに、構成は決して生じないと主張するものもいる。確かに、構成が生じることが決してないのなら、「液晶+キーボード」を受け入れる必要がないのも明らかである。

だが、こう主張するなら次のことに注意しなければならない。モニターやキーボードがパソコンの部分であることは明らかのように思われるが、この主張によれば、そういった部分によって構成されている対象は存在しない。したがって、もしパソコンの存在を認めるならば、モニターやキーボードの存在を否定しなければならない。だが、パソコンだけでなくあらゆる物質的対象は、結局はクォークなどの素粒子からできているはずである。したがって、パソコンの存在を認めるためには、素粒子の存在を否定しなければならない。これは物理学による発見を否定することではないだろうか。

よって、もし構成が決して生じないのなら、それはパソコンの部分が存在しないからではなく、むしろパソコンの方が存在しないからだとすべきだろう (12)。これは、この世界の究極の「構成」要素（以下、これを**原子**と呼ぶ）だけが存在

するという主張であり、(Mereological) Nihilism(13) と呼ばれる。

Nihilism：メレオロジー的階層の一番下に位置する対象（すなわち原子）だけが存在する。

日常的対象の存在を認めないことは、常識的には存在しないと考えられている対象の存在を認める Universalism よりもよっぽど問題だと思われるかもしれない。この批判に対する Nihilism からの応答は、パラフレーズを用いるものである。すなわち、日常的対象に言及した文の真理条件を原子だけに言及した文によって与えるのである。以下はその一例である：

(P1) 机がある ⇔ 机状に配列した複数の原子がある (14)

こういったパラフレーズが正当ならば、日常的対象に言及したどのような文に対しても、(P1) と同様のパラフレーズにより、そういった言及を含まない文を与えることができることになる。

パラフレーズは存在論においてよく見かける手法であるが、多くは存在論的還元のために用いられる。すなわち、問題のある存在論的コミットメントをしている文に対し、それと同値だが問題のない文を与えることにより、元の文が抱えている存在論的コミットメントを回避できると論じられる。だが、Nihilism でのパラフレーズはこれとは多少異なる。というのも、存在論的還元という観点からは特に違いはないが、それに加えて、自らの存在論では存在しない対象が見かけの上では存在することを説明する道具にもなっているからである。

さて、こういったパラフレーズにより、日常的対象に言及した文の真理値が適切に説明されるのであれば、Nihilism はかなり魅力のある立場のように思えてくる。改めて考えてみれば、Nihilism の主張することはそれほど奇妙ではない。机やイスなどの日常的対象をはじめとする物質的対象がすべて素粒子から構成されているとすると、素粒子は（メレオロジーの意味での）原子となる。すると、Nihilism は素粒子しか存在しないという主張になる。これは物理学者ならば受け入れてもおかしくない主張である。もちろん、物理学者の全員が Nihilism を支持するとは限らないし、「物理学を受け入れるのなら Nihilism も受け入れなければ

ばならない」などということはない。だが、少なくとも Nihilism は物理学とうまく合致しているのである。

2.3. From Nihilism to Monism

もちろん、以上のことが Nihilism の正しさを確立しているわけではない。たとえば Universalism も Nihilism のようにパラフレーズを使って、「液晶+キーボード」が存在するということの奇妙さをうまく説明できるかもしれないし、誰もが納得のいく構成の条件が見つかるかもしれない。しかし、Nihilism がそれなりに魅力のあるものであることは確かだと思われる。

だが、そうだとすると Monism も検討に値する立場であるということのように示すことができる。前述のように、Nihilism が存在するのを認めるのはメレオロジー的階層で一番下にある対象だけである。ゆえに構成は生じず、奇妙な対象は存在しないという帰結が得られる。しかし、なぜ一番下にある対象なのだろうか。どのレベルの対象だけが存在するとしても、構成が生じないことになることには変わりはない。とはいえ、中間的レベルのどれかが存在論的に特別だとは考えにくい。しかし、一番上はどうだろうか。しかも、メレオロジー的階層で一番上にある対象が唯一存在することはメレオロジーの公理によって保証される（以下、この対象を**宇宙 (Universe)**と呼ぶ) (15)。要するに、Nihilism がメレオロジー的階層の一番下を特別視していたのに対し、Monism は一番上を特別視するのである。

Monism : メレオロジー的階層の一番上に位置する対象（すなわち宇宙）だけが存在する。

Monism も Nihilism と同様に、日常的对象が存在しないという帰結を持っている。しかし、これも Nihilism と同様に、パラフレーズによって説明できるとされる。以下はその一例である：

(P2) 机がある ⇔ この宇宙は「机がある」を真にするある性質 F を持っている (16)

だが、一見して明らかなように、(P2) は (P1) ほど直観的なパラフレーズではない。どうしてこのようなパラフレーズが許されるのだろうか。ここで重要なのは、いわゆる存在論の実質的適合性である。ある存在論が**実質的に適合である (materially adequate)** とは、科学や常識をある程度「再構成」できるということである。このことは存在論が「まとも」であるための必要条件だと考えられている (17)。こういった「再構成」をどうやって行うかは細部まで明らかにされる必要があるが、最終的に元の文の「正しさ」を保証できればいいだろう。よって、許される存在者が持つ性質によって元の文の真理値が正しく決定されるのなら、パラフレーズの資格を満たしていると考えられる。(P2) は F を具体的に特定する方法や宇宙が F を持つかどうかを判定する方法は与えていないものの、この条件は満たしている。

Monism には、Nihilism より優れている点が少なくとも二つある (18)。ひとつは、Gunk の問題を回避できることである。Gunk とは、無限に分割可能な対象、すなわち、そのどの部分についてもさらに部分がある対象のことである。先程述べたように、Nihilism で存在するのはメレオロジーの意味での原子だけであり、素粒子がそうだと考えられる。しかし、これは現在知られている素粒子が物質の究極的な構成要素である（あるいは、まだ発見されていないが、現状の「素粒子」を構成する究極的な構成要素が存在する）ということを仮定している。いかにもっともらしいとはいえ、この仮定はアプリオリに真でもなければ、これが正しいという絶対的な保証もない。少なくとも、現在知られている素粒子にさらなる部分があり、その部分にもさらなる部分があり、というように無限に続いていくということを否定する決定的な証拠はまだ見つかっていないはずである (19)。要するに、素粒子が Gunk であることも「経験的には可能なシナリオ」なのである。

さて、ある物質的対象が Gunk だとしよう。このとき、Nihilism では Gunk の存在は認められないので、その対象に言及する文をパラフレーズする必要がある。ところが、これは不可能である。(P1) で見たように Nihilism は、問題のある対象を、それを構成する原子の集まりを用いてパラフレーズする。だが、Gunk にはそれを構成している原子が存在しない。Gunk に部分はあるが、そのどの部分にもさらなる部分があるため、どの部分も原子ではないからである。言ってみれば、もしある対象が Gunk ならば、メレオロジー的階層の「底が抜けている」ことにな

るので、メレオロジー的階層で一番下の対象である原子に訴えて説明することはできないのである。

このように、NihilismのパラフレーズによってはGunkの存在を説明できないのに、Gunkが存在する可能性は排除されていない。もちろん、本当にGunkは存在しないかもしれない。しかし、もしGunkが存在するならば、そのことはNihilismにとって大きな障害となるだろう。よって、少なくともNihilismはそういう潜在的な問題を抱えているのである(20)。一方、Monismに対しては、Gunkが何の問題も生じさせないことは明らかである。Monismのパラフレーズはメレオロジー的階層で一番上の対象に訴えるものであり、「底が抜けている」からといって何の影響も無い(21)。

MonismがNihilismより優れているとされるもうひとつの点は、存在論的に儉約的であることである。言うまでもなく、Monismでは物質的対象はたったひとつしか存在しないのだから、おそらくは(素粒子の数だけ)無限に多くの原子の存在を認めるNihilismより、圧倒的に儉約的だと言える(22)。

まとめると、Nihilismがメレオロジー的階層の一番下の対象に注目するのに対し、Monismは一番上の対象に注目する。そしてどちらも、存在しない対象に言及した文はパラフレーズによって処理するという点では変わらない。両者にはそれだけの違いしかないのに、MonismはGunkの問題を回避でき、しかも存在論的にはずっと儉約的である。したがって、NihilismからMonismへと宗旨替えしても、得るものこそあれ、失うものはほとんどないように思われる(23)。ならば、Nihilismがまともな存在論的立場である以上、Monismも同様だと考えるべきであろう。

3. Against Monism

当然ながら、Monismに対してはいくつかの批判がある。本節では、その中でも代表的だと思われる組み合わせ論的批判について論じる(24)。

3.1. Monism に対する組み合わせ論的批判

組み合わせ論的批判とは次のような批判である。4×4に並んだ16個のドットしか存在しない世界を考えてほしい。そして、このドットの状態はオンとオ

フの二通りしかないとする。この世界のありかたが全部で 2^{16} 通りであることは明らかだと思われる。このことは、Universalism や Nihilism では同じ仕方で容易に説明できる。この世界のメレオロジー的階層で一番下にある対象の数が16であり、その状態が二通りだからである（もちろん、両者の間にはほかの対象の存在を認めるか否かという違いがあるが）。しかし Monism では話が異なる。Monism の世界観からすれば、この世界には16個のドットがあるのではなく、16のドットから成るように見えるひとつの対象（この世界における宇宙）が存在するだけであり、それが様々な性質を持つがゆえに、あたかも16個のドットがそれぞれオンだったりオフだったりしているように見えるだけなのである。すると、この世界のありかたが 2^{16} 通りなのは、この宇宙が持ちうる性質がちょうど 2^{16} 通りだからだと説明されることになるだろう。だが、この「 2^{16} 」という数字はいったい何に由来するのだろうか。Monism には、この数字を持ち出す根拠がないのである。

この批判は、Monism が誤りであることを決定的に示すようなものではない。たとえば、Monism の支持者は、こういった批判は批判者の直観に基づいているに過ぎないと反論できるだろう。だが、Nihilism では、こういった批判はそもそも問題にならず、特別な主張をする必要もない。もし Monism を支持するには何らかの主張をしなければならないのであれば、前節の最後で述べたように「Nihilism から Monism へと宗旨替えしても失うものはほとんどない」とは言えなくなってしまうだろう。

3.2. 二つの Monism

これに対し、Monism の側からは次のような応答が可能である。いかなる存在論にとっても、もしある対象の存在を認めないのであれば、その対象が存在しないと云わねばならない以上、存在しない対象に言及することは不可欠である。しかし、存在しない対象に言及するとは、まさにその対象がある意味で存在するのを認めることである。存在論においてパラフレーズが重要な役割を果たすのはここである。前節で述べたように、パラフレーズは、自らの存在論では存在しない対象が見かけの上では存在することを説明する道具になっている。つまり、存在論的論争においてパラフレーズが必要なのは、ある対象が本当は「存在しない」

と主張するためなのである。すると、第一節の Monism の特徴づけに現れていた「存在しない」は、ただ文字通りに受け取るのではなく、「(パラフレーズなどの) 何らかの手段により、単なる見かけ上の存在として説明される」ということだと解釈してもよいはずである。

以上のことを踏まえると、「物質的対象はただひとつしか存在しないという存在論」というフレーズは二通りの解釈が可能であり、それに応じて二種類の Monism を区別することができる。

Existence Monism : 物質的対象はただひとつしか存在しない (以下, EM).

Priority Monism : ファンダメンタルな物質的対象はただひとつしか存在しない (以下, PM).

つまり、一口に Monism と言っても、物質的対象は文字通りの意味でひとつしか存在しないという立場と、物質的対象のうち、単に見かけ上でないものはひとつしかないという立場に区別できるのである (25).

EM の方はこれまで論じてきた Monism とあまり違いはないが、PM の方は多少の説明を要するだろう。EM とは違い、PM ではファンダメンタルでない物質的対象がいくらあってもよく、そういった対象に言及する文をパラフレーズする必要すらない。にもかかわらず PM もまた Monism とみなしてよいのは、PM の「ファンダメンタル」は真の意味で存在するものに対してのみ当てはまる述語とみなしうるからである。要するに、物質的対象のうち、真の意味で存在するのはファンダメンタルなものだけであり、PM は、真の意味で存在する物質的対象がひとつしかない」と主張しているという意味でやはり Monism なのである。

このためには、部分全体関係がファンダメンタリティに関する方向性 (以下、これを存在論的プライオリティと呼ぶ) と一致していなければならない。つまり PM は、部分と全体の関係にある物質的対象は、部分の方の存在論的プライオリティは低く、全体の方の存在論的プライオリティは高い、と主張しなければならない。もし存在論的プライオリティとメレオロジー的階層が無関係であれば、ファンダメンタルな物質的対象はひとつだと主張するためには別の根拠が必要になるからである。

さて、PM では上記の批判は次のように容易にかわすことができる。真の意味

で存在するのは宇宙だけだが、宇宙が持つ各部分もある意味で存在している。そして、問題の状況設定は、この宇宙が究極的には 16 個の部分に分割できるということだと理解できる。これが「16」という数字の根拠なのである。

しかしながら、こういった PM の応答がどれほど正当かについては既に疑念が提起されている。PM の「ファンダメンタル」という言葉遣いからすれば、「ファンダメンタルな事実」や「ファンダメンタルな性質」という言葉も有意味なはずである（ファンダメンタルな対象が持つ性質がファンダメンタルな性質であり、ファンダメンタルな対象がファンダメンタルな性質を持つことにより成り立つ事実がファンダメンタルな事実だと考えてよいだろう）。よって、組み合わせ論的批判で問題になっていた世界のありかたは、まさにファンダメンタルな事実のほずである。だが、それが 2^{16} 通りだったのは、オンとオフの二通りの状態をとりうる対象（すなわち宇宙の部分）が 16 個あるからだった。すると、この世界にとってファンダメンタルな対象は、むしろこの 16 個の対象であり、ファンダメンタルな性質はこういった対象がオン（またはオフ）であることではないだろうか。

これに対し、16 個の部分を持ち、各部分が二通りの状態をとりうるということは、この世界の宇宙が持つ性質であり、したがってやはりファンダメンタルなのは宇宙の方であると答えることもできるだろう。しかし、なぜこの世界の宇宙はそうした性質を持っているのだろうか。仮に部分の方に存在論的プライオリティを認めると、ファンダメンタルな対象は小さなものとならざるをえないので二通りの状態しかとりえないのは極めて自然に思われる。しかし、PM では、この宇宙が 16 個に分割できることも、各部分の状態が二通りしかないことも「厳然たる事実 (brute fact)」としか言いようがないように思われる。

Monism の側からさらに応答することも不可能ではない (26)。だが、冒頭にも述べたように、こういった批判により Monism が決定的に反駁されるかどうかを見定めることは本稿の目的ではない。本稿の目的からすれば、Monism に関してこういった議論が展開されていることが確認できれば十分である。

4. 存在論的プライオリティとパラフレーズ

これまでに見てきた Monism (特に PM) に関する議論から引き出しうる教訓は、存在論的立場は単に存在者のリストを与えるものとみなすべきではなく、むしろ

存在論的プライオリティに関するものとみなすべきだ、ということである。

一般に、存在論とは〈何が存在するか〉についての理論のことだと考えられている（分野の名称としての「存在論」は無視する）。すると、PMは〈何が存在するか〉についての理論ではなく、むしろ存在論的プライオリティに関する理論なのだから、存在論とは呼べないと思われるかもしれない(27)。確かに、PMの根本的主張は存在論的プライオリティと部分全体関係が一致するということだとみなすこともできる。しかしながら、このことはPMが〈何が存在するか〉についての理論であることを否定するものではない。そもそもPMは、Monismの定式化に現れる「存在しない」をある特定の仕方で解釈したものである。〈何が存在するか〉についても、同様の解釈をほどこせば（つまり、〈何がファンダメンタルな対象か〉と解釈すれば）、PMが〈何が存在するか〉についての理論となることは明らかである(28)。

逆に、存在論を文字通りの意味での〈何が存在するか〉についての理論だとみなすべきではないと考える根拠もある。たとえば、「存在する」の文字通りの意味が何なのかは論争の的となっている(29)。こういった論争が有意味なかたちで行われている以上、存在論を単に「存在する」対象のリストを与えるものとみなすことは、特定の立場にコミットしている恐れがある(30)。

存在論を〈存在論的プライオリティをどう与えるか〉に関する理論とみなすと興味深い帰結が得られる。PMは存在論的プライオリティが部分全体関係によって与えられるという立場だったが、EMは、パラフレーズによって与えられるという立場だと解釈できる（パラフレーズが見かけ上の存在者を説明する道具になっていることを思い出されたい）。EMにおける存在論的プライオリティは、PMとは違って形式的に表現できるとは考えにくいだが、それでも、パラフレーズされる文は真であるがファンダメンタルな事実を表していない、という点では変わらない。当然 Nihilism についても同様のことが言える。Universalism は、メレオロジー的階層の中に存在論的プライオリティを認めない立場だということになるだろう。

また、EMやNihilismのようにパラフレーズを用いることは、儉約的な存在論の常套手段である。たとえば現在主義・現実主義・唯名論はどれも、過去や未来の対象（現在主義）、可能世界や可能的対象（現実主義）、数学的对象（唯名論）という、自らの存在論では存在しない対象に言及した文を、自らの存在論で認め

られる対象だけに言及する文によってパラフレーズする。なぜこうしたパラフレーズが必要なのかは、存在論にとって実質的適合性が必要条件だと考えられているからである(2.3節を見よ)。いまや、このことをさらに説明することができる。実質的適合性は、単に常識や科学(あるいは直観)を維持するためのものではない。常識や科学で認められている対象が「ある意味で」存在し、そういった対象に言及した文が「ある意味で」真であることは否定できない。実質的適合性の要求は、この「ある意味で」の内実の説明を要求することにはかならない。そして、存在論的プライオリティは、まさにこれを遂行するためのものである。すなわち、EMやNihilismからすれば、日常的对象に言及した文はパラフレーズされるがゆえに、こういった対象の存在論的プライオリティは低い。したがって「ある意味で」しか存在しないのである。

さらに、存在論的プライオリティを表すのを部分全体関係とパラフレーズだけに絞る理由もない。実際、たとえばスーパーヴィーニエンスは、ある種の存在論的プライオリティ関係を表したものだと考えられる。スーパーヴィーニエンス関係は、部分全体関係と同じ意味で「存在論的に無垢(ontologically innocent)」だとも主張されているからである(31)。こういった関係はほかにもありうるだろう。

このような〈パラフレーズをはじめとする様々な手法で存在論的プライオリティを与える理論〉という存在論の捉え方には違和感があるかもしれない。しかし、本稿で述べたことが正しければ、Monismに関する論争は、まさにそのような(おそらくは改訂的な)存在論観を示しているのである。

注

- (1) 本稿の作成にあたって、神戸大学 Davidson 勉強会には大変お世話になった。特に、成瀬尚志、稲岡大志、杉本俊介、井頭昌彦、笠木雅史、矢田部俊介の各氏には深く感謝する。
- (2) 「Monism」という用語は一元論を指すことが多いが、本稿で論じる Monism は「Monism」一般ではなく、考察の範囲を物質的对象に限って、その数は1であるとする理論である。また、抽象的对象については本稿を通じて論じない。
- (3) 本稿で扱う「物質的对象(material object)」に正確な規定を与えることは難

- しいが、ある空間領域を占め、重さがあり、物質からできており、運動するものは物質的対象だと考えてよいだろう。要するに、物質的対象とは物体とみなしうるもののことである。なぜ物質的対象の存在論が形而上学的問題となるのかについては、van Inwagen (1990), intro. を参照されたい。
- (4) 歴史的には、Monism はパルメニデスにまで遡ることができる（もっとも、本当にパルメニデスや彼の支持者が Monism を主張していたかについては議論がある。Rea (2001), n. 1 を参照されたい）。よって、厳密には「何度目かの再登場」である。
- (5) これは厳密には次のように表される公理図式である： $\exists x \phi \rightarrow \exists z \forall y (Oyz \leftrightarrow \exists x(\phi \ \& \ Oyz))$
- (6) もちろんこのことには議論の余地がある。Varzi (2003), sec. 2.1 を参照されたい。
- (7) とはいえ、間接的には関係する。注 (12) を見よ。
- (8) 融合 (fusion) と構成 (composition) にはこういった細かな使い分けはあるが、以下では特に指定しない限り同義のもとして扱う。
- (9) この図は、Schaffer (2007a), p. 180 の図を参考に作成した。
- (10) この名称は van Inwagen (1990) で導入されたものであるが、〈構成はあらゆるところで(つまり普遍的に)生じるとする立場〉という趣旨だと思われる。Universalism の代表例としては、Lewis (1986) が挙げられることが多い。
- (11) 関心のある方は、Rea (2001), pp. 134-141 を参照されたい。
- (12) これとは別に、机と素粒子はどちらも存在しているが、素粒子は机の部分ではないとすることも考えられる。だが、この場合、机とそれを構成している素粒子の集まりの関係は、粘土の像とそれを構成している粘土のかたまりの関係とパラレルになる。つまり、この路線をとることは、問題を一致のパラドックスへとシフトさせることにほかならない。
- (13) Nihilism も Universalism と同様、van Inwagen (1990) で導入された立場である。Nihilism の支持者としては、Dorr (2005) が挙げられる。
- (14) これは van Inwagen (1990) で導入された有名な手法である。
- (15) 無制限融合により、すべての対象から構成される対象があることが保証され、外延性により、そういう対象がひとつしかないことが保証される。
- (16) このパラフレーズは、Sider (2007), p. 2 をヒントにしたものであり、こ

う主張する特定の論者がいるわけではない。Schaffer (2007a), p. 179 では、「[Universe] is aspected table-ishly」というパラフレーズが提案されており、Sider (2007) では、「[Universe] is tabley-here」というパラフレーズも挙げられている。

(17) Cf. Sider (2008), p. 129.

(18) Schaffer (2007a) では、こういった Monism の利点がいくつか挙げられているが、この二点は sec. V および VII で説明されている。

(19) Cf. Zimmerman (1996).

(20) Gunk の問題に対しては、無限小の対象を導入することによって解決できるかもしれない。この解決案には、原子と無限小の対象の存在論的身分には違いがあるように見えるという疑念があるが、そもそも、こうやって解決できるとしても、Monism が Nihilism より劣ることになるのではなく、Monism が Nihilism より優れている点がひとつ減るだけに過ぎない。

(21) Gunk とは逆に、メレオロジー的階層の「天井が抜けている」のであれば Monism にも同様の問題が生じると思われるかもしれない。しかし、注 (15) でも述べたように、メレオロジーではそういうことがないことが保証されている（この点は集合論的階層とメレオロジー的階層が大きく違うところである）。よって、もし本当に「天井が抜けている」のだとすれば、それはメレオロジーが成り立っていないことを意味する。その場合は、メレオロジーを手がかりに物質的对象の存在論を考えるという方針そのものを再考しなければならなくなるだろう。したがって、Monism 自体に Gunk の問題に対応するような問題があるわけではない。

(22) 存在論的儉約の観点からすれば、一切の対象の存在を認めない存在論の方が Monism よりも優れていると言えるだろう。ただし、その存在論でのパラフレーズはさらに困難になることが予想される。Hawthorne and Cortens (1995), sec. II を参照されたい。

(23) Cf. Schaffer (2007a), sec. IV.

(24) 以下の説明は Sider (2007) での説明に基づくが、紙面の都合上かなり簡略化しており、Sider の論点を忠実に再現したものではない。

(25) 両者の違いは次のように形式化すればはっきりするだろう（「M」は「物質的对象である」、「F」は「ファンダメンタルである」とする）。詳しくは

Schaffer (2007b) を参照されたい。

EM : $\exists x(Mx \ \& \ \forall y(My \rightarrow y = x))$

PM : $\exists x(Mx \ \& \ Fx \ \& \ \forall y((Mx \ \& \ Fy) \rightarrow y = x))$

(26) たとえば Sider (2008) は可能な応答をできる限り展開している (ただし、結論は Monism にとって否定的である)。

(27) Cf. Sider (2008), n. 5.

(28) この場合、PM の定式化に現れている「存在しない」は違う意味で (要するに存在量化を用いて) 解釈する必要がある。つまり、存在論と存在量化を切り離さなければならない。これは本稿の主張の問題点かもしれない。

(29) 分析的形而上学では、「存在する」を存在量化と同一視するのが極めて一般的であるが、たとえばマイノング主義のように、これを否定する立場もある。また、「存在する」ことの基準を量化の対象であることに求めるのではなく、単称名辞であることに求める立場もある。

(30) ただし、こういったコミットメントを自覚した上で存在論を存在者のリストを与えるものとみなす、という立場は可能であろう。この立場と本稿の立場の間にはメタ存在論上の対立があると思われる。

(31) 詳しくは McLaughlin and Bennett(2005), sec. 3.4 を参照されたい。

参考文献

Dorr, Cian (2005). "What We Disagree About When We Disagree About Ontology." In Mark Eli Kalderon (ed.), *Fictionalism in Metaphysics*, 234–286. Oxford: Clarendon.

Hawthorne, John (O'Leary-) and Andrew Cortens (1995). "Towards Ontological Nihilism." *Philosophical Studies* **79**: 143–165.

Lewis, David (1986). *On the Plurality of Worlds*. Oxford: Basil Blackwell.

McLaughlin, Brian and Karen Bennett (2005). "Supervenience." In Edward N. Zalta (ed.), *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Fall 2005 Edition). URL = <http://plato.stanford.edu/archives/fall2005/entries/supervenience/>.

Rea, Michael C. (2001). "How To Be an Eleatic Monist." *Philosophical Perspectives* **15**: 129–151.

- Schaffer, Jonathan (2007a). "From Nihilism to Monism." *Australasian Journal of Philosophy* **85**: 175–191.
- (2007b). "Monism." In Edward N. Zalta (ed.), *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Spring 2007 Edition). URL = <http://plato.stanford.edu/archives/spr2007/entries/monism/>.
- Sider, Theodore (2007). "Against Monism." *Analysis* **67**: 1–7.
- (2008). "Monism and Statespace Structure." In Robin Le Poidevin (ed.), *Being: Developments in Contemporary Metaphysics*, 129–150. Cambridge: Cambridge University Press.
- Simons, Peter (1987). *Parts: A Study in Ontology*. Oxford: Clarendon.
- van Inwagen, Peter (1990). *Material Beings*. Ithaca: Cornell University Press.
- Varzi, Achille (2003). "Mereology." In *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Fall 2003 Edition). URL = <http://plato.stanford.edu/archives/fall2003/entries/mereology/>.
- Zimmerman, Dean W. (1996). "Could Extended Objects Be Made Out of Simple Parts?: An Argument for 'Atomless Gunk'." *Philosophy and Phenomenological Research* **56**: 1–29.